

協働で授業検討を行うことによる効果に関する研究

— 特別支援学校における学年での授業検討を通して —

神奈川県立えびな支援学校

木部美和子

本研究の目的は、特別支援学校における、学年単位で定例的に行う授業検討の場を設定したことによる効果を検証することである。

近年は、教員の大量退職、大量採用の影響等により、大都市の学校は若手教員が増加し、中堅、ベテラン教員の割合が減少するといった年齢構成の不均衡が見られるようになってきた。また、社会の変化に伴い、教員の多忙化も課題となっている。開校2年目のA特別支援学校においては、異動2校目の若手教員が多くいるが、実力のある中堅、ベテランの教員もいる。しかし、学部によっては年齢や特別支援教育経験年数の偏ったクラス担任の編成も見られ、加えて多忙化の影響から若手教員が中堅、ベテラン教員から学ぶ機会が少ない現状がある。今後はさらにこの傾向が増すことから、クラス担任の年齢構成の均衡を維持していくことは難しくなると考えられる。そこで本研究では、その対応策の一つとして、若手教員の授業づくりを対象とした、クラスを超えた「学年単位」での授業検討を「定例的に行う」ことを試み、そこで得られる効果について検証することにした。

課題解決の方法として、若手教員の授業を対象とした学年単位での授業検討を、9月から12月までの期間で週1回設定した(全10回実施)。授業検討会では、ビデオ映像を元に子どもの姿からよかった点や改善が必要な点等について意見を出し合った。筆者は経験学習モデル(Kolb 1984)を循環させることを意識したファシリテーションを行い、教員から出された意見を板書し視覚化するようにした。

実践の結果、授業検討を学年単位で行ったことは、他クラスの教員の意見を受けて知見が広がったり、実態の似ている生徒に対する手立てが参考になったりするなど、クラス単位では得られないアドバイスや手立てを得ることにつながった。また、定例的に行ったことは、ビデオ映像による授業の様子(D)から子どもの姿を共有し(C)、

改善策を挙げて(A)次の授業に活かす(P)といったPDCAサイクルを何度も回すことで、徐々に授業が変わっていく実感をほぼ全員が実感することにつながった。さらに実践の中で、若手教員であるB教諭が自らの疑問や悩み等を話せるようになることや、他の教員の意見や生徒の姿から改善点を次の授業に活かすことを通して成長していく様子が見られた。これらのことから、「学年単位」で「定例的に行う」授業検討会が有効であったと考えられる。

一方で、課題点も挙げられる。個別教育計画の重点課題を意識した授業づくりのために「ふりかえりシート」を作成したが、記入する時間がなく負担感につながるといった意見もあった。また、授業全体のねらいの妥当性については話が及ばなかった。「ふりかえりシート」については、より活用しやすい書式にしていこう、授業全体のねらいについては、学年で「育てたい子ども像」についてビジョンを共有することが必要であると考えられる。

今後はこの検証結果から、課題点をふまえ、他学年にも授業検討会を定例的に行うことを広げ、授業検討を行うことの習慣化を目指したい。そうすることで、日々の授業そのものが研究となり、教員一人ひとりの知見の広がりや子どもの実態をもとにした授業づくりができるようになるであろう。